自然の響き

真銅正宏

Sounds of nature

Masahiro Shindo

一、鳥の声

自然の音の中で、我々が耳にする最も身近で、最も印象的な音は、動物の鳴き声であろう。とりわけ鳥の声は、音も大きく、また特徴的なものが多く、日常生活の中で気づき易く、聞き分け易いものであろう。そのために、古来、日本の文学作品の中にも多く書き留められてきた。「千載集」の藤原実定の「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる」などである。この鳥の声への注目は、近現代文学の中にも引き継がれている。

近代文学における特徴を敢えて挙げるならば、鳥の声という元来自然の中にあるべきものを、「飼う」ことによって、日常生活の中に置き、鑑賞する例が多い点であろう。

代表的なものが、谷崎潤一郎の「春琴抄」（『中央公論』一九三三年六月）の中に見られる。鶯の鳴き声についてである。

> 先づ今日の例を以て話せばケツキヨ、ケツキヨ、〳〵と啼く所謂谷渡りの声ホーキーベカコンと啼く所謂高音（かうね）、ホーホケキヨウの地声の外に此の二種類の啼き方をするのが値打ちなのである此れは藪鶯では啼かない偶〻啼いてもホーキーベカコンと啼かずにホーキーベチヤと啼くから汚い、ベカコンと、コンと云ふ金属性の美しい余韻を曳くやうにするには或る人為的な手段を以て養成するそれは藪鶯の雛を、まだ尾の生えぬ時に生け捕つて来て別な師匠の鶯に附けて稽古させるのである尾が生えてからだと親の藪鶯の汚い声を覚えてしまふので最早や矯正することが出来ない。

ここに見られるとおり、「人為的な手段」を施してまで、音を洗

練させる点には、自然の鳴き声とは別の価値を探る態度が窺える。これらは、鳥という自然の存在の声であっても自然の響きではない。

川端康成の「禽獣」（『改造』一九三三年七月）もまた、小鳥を含む愛玩動物について書かれた作品である。冒頭は、「小鳥の鳴声に、彼の白日夢は破れた」という一文で始まる。主人公は、当初から、小柄な菊戴（きくいただき）、日雀（ひがら）、小雀（こがら）、みそさざい、小瑠璃（こるり）、柄長（えなが）など、可憐な小鳥の姿と触感とを主に愛でている。ただしこの作品は、小鳥の死、具体的には、紅雀、黄鶸鴿、そして菊戴を死なせてしまったことを描き、その儚さに焦点を当てているかのようである。

このような作品において、鳴鳥については、「カナリヤとか、鶯とか、雲雀とか、鳴きの花やかなものは、気に入らなかつた」と述べられる。「花やかな」鳴き声は、儚さからは遠いからであろう。しかしながら、以下のような記述も見える。

> 木菟と同じ猛禽だが、この百舌は差餌の親しみが消えないで、甘つたれの小娘のやうに彼になついてゐた。彼が外出から帰る足音を聞いても、咳払ひをしても、鳴き立てる。籠を出てゐると、彼の肩や膝へ飛んで来て、翼を喜びに顫はせる。
>
> 彼は目覚時計の代りにこの百舌を枕もとに置いてゐる。朝が明るむと、彼が寝返りしても、手を動かしても、枕を直しても、「チイチイチイチイ。」と甘えるし、唾を飲む音にさへ、「キキキキキ。」と答へるし、やがてたけだけしく彼を呼び起す声は、まことに生活の朝をつんざく稲妻のやうに爽快である。彼と幾度か呼応して、彼がすつかり目覚めたとなると、いろんな鳥を真似て静かに囀り出す。
>
> 「今日の日もかくて目出度い。」といふ思ひを彼にさせる先きがけが百舌で、やがてもろもろの小鳥の鳴声が、それに続くのである。

これは儚さとは別の小鳥の愛し方であろう。かなりの幸福感が伝わる。

ちなみに、偶然ながら、「春琴抄」と「禽獣」は同じ一九三三年に一月違いで発表されたものである。当時の世の嗜好として、小鳥の声を愛する趣味の存在を指摘することができるかもしれない。

小鳥を愛玩する小説の先駆に、夏目漱石の「文鳥」（『大阪朝日新聞』一九〇八年六月一三日～二一日）がある。主人公が、「三重吉」に勧められて、文鳥を飼うが、死なせてしまう小説である。この小説には、文鳥の鳴き声が、日々の細やかな音と共に書き込まれている。その擬音語は、文鳥がやってくる前から以下のように表現されている。

> 三重吉の小説によると、文鳥は千代々々と鳴くさうである。其の鳴き声が大分気に入つたと見えて、三重吉は千代々々を何度となく使つてゐる。或は千代と云ふ女に惚れて居た事がある

のかも知れない。

かなり軽みの感じ取られる文章である。やがて「三重吉」と「豊隆」によってもたらされた文鳥は、最初は「ちゝ」としか鳴かない。が、「自分」も文鳥に心惹かれ始める。やがて或る日、「縁側で文鳥が忽ち千代々々と二声鳴いた」のである。

筆を擱いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いた儘、留り木の上から、のめりさうに白い胸を突き出して、高く千代と云つた。三重吉が聞いたら嘸喜ぶだらうと思ふ程な美い声で千代と云つた。

ここでは、「鳴く」ではなく、「云ふ」になっている。「三重吉」を引き合いに出しながらも、すでに「自分」もかなり文鳥にのめり込んでいるようである。このあたりから、集音器もかなり微かな音を拾い始める。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。さうして二三度左右に振つた。奇麗に平して入れてあつた粟がはら〳〵と籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微な音がする。又嘴を粟の真中に落す。又微な音がする。其の音が面白い。静かに聴いて居ると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。堇程な小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の碁石でもつゞけ様に敲いて居る様な気がする。

さらに「自分」は、自ら「微な」音を立てている際に、「妙な」音も耳にする。

或日の事、書斎で例の如くペンの音を立てゝ侘びしい事を書き連ねてゐると、不図妙な音が耳に這入つた。縁側でさら〳〵、さら〳〵云ふ。女が長い衣の裾を捌いてゐる様にも受取れるが、只の女のそれとしては、余りに仰山である。雛壇をあるく、内裏雛の袴の襞の擦れる音とでも形容したらよからうと思つた。自分は書きかけた小説を余所にして、ペンを持つた儘縁側へ出て見た。すると文鳥が行水を使つて居た。

このとおり、鳥の声や水浴びの音と、人間の生活の音とが、対比されつつ、かなり小さな音量の世界まで細かに書かれているのである。あるいはこのような細やかな音にまで気づかせるようになることが、小鳥を飼うことの醍醐味なのかもしれない。

田村俊子の「魔」（『早稲田文学』一九一二年二月）は、鴇子（ときこ）という名の女主人公を持つ小説であるが、ここにも軒の鳥籠の掃除の際、「おろされながら籠の中の紅雀は、ちよろゝ、ちよろゝ、と忍び鳴きをしてゐた」という鳥の声が書かれている。この後には「田舎娘がいたづらに赤い色をつけてゐる様な小さい鳥は品わるい行作で宿り木にとまつてゐた」という文章が続く。女主人公の

造型に関わる象徴的な読みを誘う場面である。

これまで見てきたとおり、小鳥は愛玩の対象であることも多く、鳥の声としては特殊なものである。同じ飼い鳥でも、家鴨や鶏など、人間に身近でありながら、愛玩とはほど遠い声を聞かせる鳥もいるし、また、人里近い場所には、日常的に鳴き声を聞かせる鳥も多く存在する。

志賀直哉の「大津順吉」（『中央公論』一九一二年九月）には、「あうむ」が書かれている。

或午後（略）隣の西洋人の家の芝庭であうむがけたたましく地声で鳴き立て始めた。私はあうむが薄黒い円い舌を見せて羽ばたきをして、頭を振り立てながら、わめき立てる其やけらしい様子を想ひ浮べると、人間にもあんな真似が出来たら、こんな時には幾らかいいだらうと云ふやうな事を考へた。あうむは中々それを止めなかつた。仕舞に此方の気分までが段々苛立つて来る。

暫くすると、言葉はそれ程はつきりしないが、アクセントだけは正確に、「前へ！　オイッ」とか「気を附け……」とか色々な号令をたて続けに叫びだした。私の家の裏が師団の一聯隊で、西洋人の家の彼方隣が旅団司令部になつてゐる。それで自然そんな事を覚えてゐるのである。

この後半部分の鸚鵡の鳴き真似については、やはり例外として扱うべきであろうが、「地声で鳴き立て」る姿は、やはり自然の響きを引き摺っている。

青木健作の「お絹」（『読売新聞』一九一二年一月一日～二月五日。なお引用は『お絹』、春陽堂、一九一三年三月、に拠った。）は、音の表現が豊かな作品である。ここにも「ふと貫く様な鳥の声がしたのでお絹は向を見上た。と尖つた山の上を二羽の鷲が飛で居る」と鷲の声や、「暑さうな濁つた声で群れ鳴く家鴨を後にして、」と、家鴨の鳴き声が書き留められている。また、「何処で啼くのか威勢の良い鶏の声は狭い谷中の村中へ響き渡つて、何時迄も浅間しい睡眠を貪つて居る山の人々の耳を驚かさうとする如く思はれた」という鶏の声も描かれている。

また、里に近いところで鳴く身近な鳥の声についても、「何処かで、「テテツポツポ」と山鳩が倦怠る相に鳴いて居る」という描写もある。「先刻から鳴く鳩の声は未だ暑さうに続いた」とも書かれている。

さらに、「二羽の雉子が不意にけたゝましい羽音を立てゝ、立ち上つた」ともあり、実に多種の鳥の音が書かれている。

自然の中で偶然遭遇した鳴き声には、やはり自然らしさが強く備わっている。

田山花袋の「ある山の寺」（『早稲田文学』一九一五年一月）には、「慈悲心鳥が夜更けてから頻りに此方から彼方に鳴いて通つた」という表現がある。「慈悲心鳥」とは、カッコウの仲間であるジュウイチの別名とのことで、鳴き声が「じひしん」と聞こえる

故らしい。或る山の寺の客となった主人公は、眠れぬ夜などにこの鳥の声を聞き、「水の音と筧の音とに織り雑られた悲哀の中に」暮らしている。

同じ花袋の「山荘にひとりゐて」（『中央公論』一九一六年九月）にも、「カツコウ、カツコウといふ閑古鳥の声が遠くきこえた」「何処かで子規が啼いて行つた」という表現も見られる。山や夜など、静けさの条件が整った時、鳥の声はやはり耳につく音なのであろう。

さらに花袋は、「KとT」（『文章世界』一九一七年一月）においても、以下のような場面を書いている。

何といふ鳥か、名も知らない鳥が、夜もすがらかれの耳に聞えた。

『あゝそれぢやあれだ。』この山に特有な夜鳴く鳥の話が出た時、Kは言つた。『あれだ、あれに違ひない、存外高いはつきりした声で、キ、キツと鳴いて行く……あれだ、あれに相違ない。』

『さうです、さうです。』

かう其時一緒に話してゐた若い僧達が云つた。

このように、山の夜の静けさの中に聞く鳥というのは、花袋の常套の表現となっていたようである。

これらの鳥の鳴き声こそ、本来の自然の響きと言うべきものであろうが、鳥は飛翔できる極めて自由な動物であり、その活動範囲も広く、例え飼い鳥となったとしても、気を抜けば逃げる可能性を秘めていて、自然の中で生息する時との連続性を常に持ち続けている代表的な存在である。例えば志賀直哉の「好人物の夫婦」（『新潮』一九一七年八月）の冒頭には、「深い秋の静かな晩だつた。沼の上を雁が啼いて通る」という文章が見えるが、この声を、細君は針仕事をしながら、そして良人は「ぼんやりと天井を眺め」聞いている。つまりこれらは、かなり生活空間に近い鳴き声であり、家から聞こえるのであるが、やや遠い自然の中にある声なのである。このような空を飛ぶ鳥の自由な存在性が、どれだけ人工的に造られた飼い鳥の鳴き声であっても、やはりあくまで自然の響きを留めることを保証すると考えられるのである。

志賀直哉の「山の生活にて」（『改造』一九二〇年四月、後に「焚火」と改題）においては、梟の声が「先刻から、小鳥島で梟が鳴いてゐた。「五郎助」と云つて、暫く間を措いて、「奉公」と鳴く」と聞きなされている。このような「聞きなし」が多くなされてきたのも、自然を自由に飛び回る鳥の鳴き声を、人間の手元へと近づける一つと手段と見做しうるかもしれない。

二、生き物の鳴き声

家で飼われている犬や猫、また牛や鶏などの家畜の鳴き声については、自然の響きとは言い難い。しかし、それらが彼等の本能

の声ならば、自然の響きとすることも不可能ではない。

例えば佐藤春夫の「田園の憂鬱」（『中外』一九一八年九月）に描かれる飼い犬たちの鳴き声は、それが田園でもあることから、やや複雑な響きを伝える。

運動不足で癇癪を起して居る犬どもは、繋がれながら、夕方になると、与へた飯を一口だけで見むきもせずに、ものに怯えて淋しい長い声で何かを訴へて吠え立てた。その声は、雨のためにほの白く煙つた空間を伝うて、家の向側の丘の方へたどつて行くと、その丘からはその声が山彦になつて、吠え返して来た。犬はそれを自分達自身の声とは知らずに、再びより激しくそれへ吠え返した。かうして夕方毎に一しきり物凄く長鳴きした。

この「長鳴き」の声などは、自然の響きと捉えられなくもない。ただし結末近くには、再び以下のように描写し直される。

犬どもは声を揃へて吠えて居る。その自分の山彦に怯えて、犬どもは一層吠える。山彦は一層劇しくなる、犬は一層吠え立てる……彼の心持が犬の声になり、犬の声が彼の心持になる。

ここにおいて、犬の声は、彼の心象を示す譬喩ともなり、ただの鳴き声ではなく、複雑な内包を持つ音となる。「田園の憂鬱」においては、このように、音が、主人公の「憂鬱」を典型的に示すのである。

同じ犬でも、山犬となれば、その自然らしさも強まるが、危険度も上がる。前掲の志賀直哉の「山の生活にて」には、以下のような会話が書かれている。

「昔は山犬が居たんだらう」とSさんが云つた。

「子供の頃よく声だけ聴きました。夜中に遠吠えを聴くと、淋しい、いやな気持がしたのを覚えてゐますよ」

本来、自然のものの声はこのように不気味なはずである。山犬の遠吠えに比べれば、飼い慣らされた犬たちの声は、たとえそれが、田園における本能的な声であっても、真の自然の音とは別物であろう。

細田源吉の「空骸」（『早稲田文学』一九一八年一一月）にも、夜中に主人公を苦しめる苛立たしい犬の鳴き声が書かれている。

耳の内が熬りつくやうに覚えて、策三は飛び立たないばかりに眼を醒した。余りに出抜だつたので、彼の心臓は痛いほど昂つた。で、胸のあたりを不安さうに抑へた彼は、そのまゝ鳥渡の間、何を自分が意識してゐるのかも判らずにゐた。が、その内に、自分の重い睡眠を脅かしたのは、この頃朝々の例になつた隣の交尾期に入つた雌犬のまるの叫声だといふことや、それはまるが、夜中繋がれた鎖を解いて呉れと強請む為めだといふ

ことや、四辺の静寂と薄れはじめた部屋の内の暗の具合とから、まだやつと夜明前だといふことなぞを知つた。

戸外の叫声は、まるで貝殻でも摺り合はせるやうに聞えた。

さらにこの雌犬の叫声には、「雄犬の甘へ縋るやうな、もどかしがるやうな唸声や、木小屋の角で鎖のこすれる音なぞが入り混つたり」している。庭に出て見ると、隣家の雌犬が目当てらしい雄犬が二匹まで入り込んでいた。この「生暖い、淫らな朝」を主人公は嘆くのである。

「田園の憂鬱」には、鳥には違いないが、このような犬や猫、また家畜に近い、鶏の声も書き留められている。いわゆる時を告げる声ではない、以下のような不快な声である。

昼間の犬の音なしい時には、例の隣家の大尽の家では、卵を生んだ鶏が何羽も何羽も、人の癇をそそり尽さねば措かぬやうな声で、け、け、け、けけけけと一時間もそれ以上も鳴きつづけた。（略）鶏は平気で縁側へさへ上つて来て、そこへ汚水のやうな糞をしたりした。手を拡げて追ふと、彼等はさも業々しく叫び立てた。

主人公の「憂鬱」度が進行することがわかるような声である。静寂の中で耳につく音については、正宗白鳥が、「死者生者」（『中央公論』一九一六年九月）において以下のように書いている。

天井で鼠の荒れる音や、彼方此方で吠える犬の声を聞きながら、夜中といふものはこんなにも寂しいものかと思つて、耳を澄まして退屈な時を過した。

「お絹」には、「折から何処かで牛の吼える声が谷に反響した」という大きな鳴き声も書かれている。また、「何処かで噪き泣く鼠の声などに益々眼が冴えるのであつた」という音も書き込まれている。

前掲の志賀直哉の「大津順吉」には、実に切ない鳴き声が描かれている。

或午後私は二階の部屋で本を読んでゐると、表の往来で不意にキャーン〳〵と烈しい犬の啼声がして、続いて棒か何かで肉体を直接に撲るバッタン〳〵と云ふ気持の悪い響が聞えて来た。全く受け身なむごたらしい犬の悲鳴と棒の音とが暫く入り乱れて聞えてゐたが、段々に犬の啼声が細つて行くと、棒の音だけが続いて、仕舞にそれもたうとう止んで了つた。

全く後味の悪い鳴き声である。

これほどでなくとも、生き物の鳴き声には、不吉なものを想像させるものがある。また、必ずしもよい声ではないものも多い。

三、虫たちの声

随筆ではあるが、永井荷風に「虫の声」（『来訪者』、筑摩書房、一九四六年九月）という作品がある。太平洋戦争の戦時中に書かれたもので、戦後になって初めて発表された。題名のとおり、虫の鳴き声を声を中心に、鳥の声や時雨の音などについても触れた作品である。ここには、戦時中という時代背景が大きく関わっている。「梵鐘の声さへ二三年前から聞き得なくなつた」ことから「蟬と蛬の庭に鳴くのを待詫るやうになつた」理由として、以下のような言葉が綴られる。

昭和といふ年も数へて早くも十八年になつた今日、東京の生活からむかしのまゝなる懐しい音響を、われ〳〵の耳に伝へてくれるものは、かのオシイツク〳〵と蟬の鳴く声ばかりであらう。蟬も蛬も、事によつては雁や時鳥と同じやうに、やがて遠からず前の世の形見になつてしまふのかも知れない。

そして以下のような譬喩も加えられている。

二百十日が近くなつて、雨が多くなると、一雨ごとに虫の声は多くなる。ワグネルの音楽のやうに入り乱れて湧立つ如く鳴きしきる。

戦時中という有事の際であるからよけいにではあるが、虫の声は平時の日常風景を代表し、平時にはさほど意識しないものであるかもしれないが、平時を恋しく懐かしく想起させるもののようなのである。

小説に戻る。青木健作の「お絹」には、「蚊帳の外で泣く蚊の音が侘しう耳に立つた」「種々の蟬の声は益々乱れ合つて、夕立の音のやうに聞える」「お絹は渋茶を飲み乍ら耳の中を掻き廻す様な八釜しい蟬の声を聞いた」「知らぬ間に八釜しい蟬は鳴き止んで、調子の高い蜩がかな〳〵と遠近で競ひ鳴いて居る」「床下で啼く蟋蟀の幽な声が、絶えず細い枯枝を折るやうにこき〳〵と侘しく聞えるのだつた」「人声もせぬ物静な中に、背後の山や、家の右手に被さる柿の木で鳴く蟬の声のみ心をそゝる様に囃し立てる」「ふと虻が耳の側をぶんと過ぎた」「小屋の前をぶんと横ぎる山虻の羽音まで気を焦立たせる」などと、虫たちの鳴き声も数多く書かれている。「蟬が鳴き止んで、蜩の声のみ澄み渡つた空気を貫いて聞える頃、家内は帰つて来た」とあり、蟬と蜩とが区別されているようである。

坂口安吾の「蟬―あるミザントロープの話―」（『文藝春秋』一九三二年二月）に描かれる「ジンジンとした蟬の音」は、主人公の心象を代弁するものとして、やや象徴的にも語られている。

前掲の「田園の憂鬱」の冒頭近くには、田園の秋の風景として、虫のすだく音が書かれている。

夜は逸早くも秋になつて居た。轡虫だの、蜉だの、秋の先駆であるさまざまの虫が、或は草原で、或は床の下で鳴き初めた。

また、「或る夜、彼のランプの、紙で出来た笠の上へ、がさと音をたて、飛んで来たものがあつた」と書かれる「馬追ひ」の音も、自然の音に含めてもよいかもしれない。ここでは、田園という自然に迷い込み暮らし始めたのは人間の方だからである。

蜩に戻るが、水上瀧太郎の「うすごほり」（『スバル』一九一二年二月）には、「蜩が高い梢で鈴を振ると、夕暮は窓に忍んで来る」という表現が見える。多くが注意を向けて聞いていた声のようである。なおこの小説には、庭の虫の音についても「暗い隅々には虫の音がしきりでした」と書かれ、実の母を亡くして「私」の家にやってきた親戚のお澄さんの歌を、母が繰り返し節づけて歌う場面がある。その歌は、「母なくて汝（なれ）もなくらん月あかりささぬ草葉にすだくこほろぎ」というもので、自らの境遇を重ねた歌であることは言うまでもない。

泉鏡花は、蛙の声を「懸香」（『新小説』一九一五年九月）に、「ぎや、ぎや、ぎやツ、ぎや、ぎや、ぎやツ、ぎやぎやぎやツ。」、同じく蛙の高鳴きを「くわツ、くわら、くわら、くわら〳〵〳〵。」と分けて描写している。

飼い慣らしたり、稽古したりしたような小鳥の鳴き声からはかなり遠い声である。

これも永井荷風であるが、「雨瀟瀟」（『新小説』一九二一年三月）の冒頭には、季節の移り変わりを、虫の声と雨の音で表した文章が見える。

その年の二百十日はたしか涼しい月夜であつた。つゞいて二百二十日の厄日も亦それとは殆ど気もつかぬばかり、いつに変らぬ残暑の西日に蜩の声のみあはたゞしく夜になつた。夜になつてからは流石厄日の申訳らしく降り出す雨の音を聞きつけたもの、然し風は芭蕉も破らず紫苑をも鶏頭をも倒しはしなかつた――

虫の声の多くは、雨とほぼ等価に、季節を示す記号として機能していたのである。

四、海や川の水の音

これも前掲の青木健作「お絹」には、主人公のお絹が船に乗るべく汀にやって来た時、「水は河の向の半分を流れて、芭蕉の若葉が擦れ合ふやうな音を立てゝ居る」のを聞く場面がある。船に乗った後も、「ざあ〳〵と河幅一杯に流れ走る瀬の音は蟬の声をも聞えさせぬ程凄じい」という表現が見える。これと同様に「ぢつと耳を澄すと蟬の声の間から幽な谷の流の音も聞えた」と、蟬の声と水の音が対比的に描かれることもある。また、静かさとの対比について、「深い谷底を流れる瀬の音が幽な啜泣の様に聞える

のみで、大きな洞穴の中のやうに静な闇の中に立ち悚(ママ)んで居ると、自分の身体もこの闇と一所に融け合ふのかとも思はれる」とも書かれている。

波の音を詠んだものとしては、与謝野晶子の「海恋し潮の遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家」の歌（『みだれ髪』所収、東京新詩社・伊藤文友館共版、一九〇一年八月）がよく知られているが、ここに歌われた「潮の遠鳴り」とは、実際に数えるような波の音を指すのではなく、海の存在をそれほども親しみを込めて日々感じたことを示す表現であろう。

芥川龍之介の「大川の水」（『心の花』一九一四年四月）には、大川の水の音が、プレテクストと共に愛情たっぷりに以下のように描写されている。

あゝ、其水の声のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、両岸の石崖を洗つてゆく。班女と云ひ業平と云ふ武蔵野の昔は知らず、遠くは多くの江戸浄瑠璃作者、近くは河竹黙阿弥翁が、浅草寺の鐘の音と共に、其殺し場のシユチンムングを、最力強く表す為に、屢々、其世話物の中に用ゐたものは、実に此大川のさびしい水の響であつた。十六夜清心が身をなげた時にも、源之丞が鳥追姿のおこよを見染めた時にも、或は又、鋳掛屋松五郎が蝙蝠の飛交ふ夏の夕ぐれに、天秤をになひながら両国の橋を通つた時にも、大川は今の如く、船宿の桟橋に、岸の青蘆に、猪牙船の船腹に懶いさゝやきを繰返してゐたのである。

谷崎潤一郎の「金色の死」（『東京朝日新聞』一九一四年一二月四日～一七日）には、やや異常な水の音が描かれている。「何処からともなくちよろ〳〵と涓滴のしたゝる音が聞えて来」た時、岡村に「あの音のするところへ行つて見給へ。」と言われて行ってみると、アングルの「泉」を本物の美女が再現しているところに出、さらには、「中では幾十人の人々が海豚の如く泳いで居ると見え、盛んに湯水のぴしやぴしやと跳ね上る音が聞える」ので、その扉を開けて入って行くと、そこにも美女の一群によって演じられている部屋に案内されるのである。ここでは、音が先ず案内となり、期待を募らせ、その後に、種明かしのように、秘密の部屋の様子が視覚的に登場させられるという類型が認められる。

三島由紀夫の「潮騒」（『潮騒』新潮社、一九五四年六月、書き下ろし）は、正にこの潮の音を題名にした作品である。そしてそれは、主人公である新治自身をも譬喩する。第六章には以下のような文章が見える。

若者は彼をとりまくこの豊饒な自然と、彼自身との無上の調和を感じた。彼の深く吸ふ息は、自然をつくりなす目に見えぬものの一部が、若者の体の深みにまで滲み入るやうに思はれ、彼の聴く潮騒は、海の巨きな潮の流れが、彼の体内の若々しい

血潮の流れと調べを合はせてゐるやうに思はれた。新治は日々の生活に、別に音楽を必要としなかつたが、自然がそのまま音楽の必要を充たしてゐたからに相違ない。

この譬喩に典型的なように、新治は三島作品の中でも特異なほど、内省の度合いの低い、実に「自然」に近い存在である。

先にもみた田山花袋の「ある山の寺」には、水の音が豊富に描かれている。「なにがし院といふ寺は、山から川の方へ下りたところにあつた。水の音が屋を撼すやうに聞えた」と紹介されるとおりである。主僧の別の寺では、「湯殿には筧から水がザン〳〵落ちて、綺麗な湯が溢るゝばかりに沸いてゐた」りするが、普段は無住のこの寺では、秋が深まると「筧に来てゐた水ももうすつかり池には来なく」なる。また春が来ると、「池には蛙の声が喧しく聞え」「慈悲心鳥は矢張いつものやうに、夜深く鳴いて此方の谷から彼方の谷へと行」くのである。

このように、水の音が、鳥の声などの他の自然の響きと組み合わされることにより、聴覚世界が立体的に拡がることは言うまでもない。

五、雨の音の実態

ところで、川や雨自体の音とはどのようなものであろうか。元の音なるものは存在するのであろうか。水が何かに当たって初めて、その存在が感じられる、いわば間接的な音としてならばそれはよく理解できる。波の音も、砂浜などに寄せて返す際の摩擦音であろう。水の音とは、何かと何かとのぶつかりの音とひとまずは言えるのではなかろうか。

雨の音は、あるいはその代表的なものかもしれない。何かにぶつかることで初めてその存在を主張する。これも「お絹」に以下のような場面が見られる。

掃除の日の夕方から空に雲が蔓つて、到頭夜になつて雨になつた。久しく天気が続いた勢か、その夜は激しく降つて、寝て居ても、小さい藁屋根やその四辺に灑ぐ音がざあ〳〵と耳に騒しく聞える。お絹は彼方で客の無い夜など一人部屋に寝て居る時、トタン屋根に此様雨が高い音を立てるのが淋しく胸に泌み（ママ）入るやうで、堪らず両手で耳を蓋うた事の度々あつたのを思ひ起して、少時眠られなかつた。

夏目漱石の「彼岸過迄」の「雨の降る日」（『東京朝日新聞』一九一二年三月五日～一二日）には、題名にも採られている雨の音が書かれている。

其うちに曇つた空から淋しい雨が落ち出したと思ふと、それが見る〳〵音を立てゝ、空坊主になつた梧桐をしたゝか濡らし始めた。（略）

「芭蕉があるもんだから余計音がするのね」

ここにも、芭蕉に当たる音としての雨の音が描かれている。この後にも、以下のように書かれる。

雨はまだ降り已まなかつた。夕方芭蕉に落ちた響はもう聞こえない代りに、亜鉛葺（トタンぶき）の廂にあたる音が、非常に淋しくて悲しい点滴を彼女の耳に絶えず送つた。

今度は「亜鉛葺の廂」に当たる音が、雨の音として描かれるのである。

同じ時期の小説に、長田幹彦もまた、「夜となく昼となく、寂しい氷雨がはらはらと亜鉛葺きの屋根に降り灑ぐやうな日が幾日となく続いた」と、同じような表現を用いている。「零落」（『中央公論』一九一二年四月）という作品で、「淋しい」「寂しい」という言葉も響き合っている。北の国が舞台であるこの小説においては、雨ばかりではなく、「亜鉛葺の屋根を打つ霙の音」も聞こえている。これらの音は「零落」をも象徴するのであろう。

ところで、雨の音の擬音は、これらにはあまり書かれていない。豊島与志雄の「球突場の一隅」（『新小説』一九一六年二月）の冒頭には、「しとしととした淋しい雨だつた」という表現が見える。この「しとしとと」というのが、雨の音としては最もよく用いられるものであろう。しかし、この豊島の例でもそうであるが、この表現は、擬音とも擬態とも読める。

雨自体の音は本来存在せず、何かに当たる音がその正体であるが、何に当たっているのかわからないような微かな雨音については、「しとしとと」などという、擬音語とも擬態語とも見える言葉でしか表しようがないのかもしれない。おそらくこの「しとしとと」とこそは、譬喩として作り出された雨の音なのであろう。

六、風の音

本来の音がないことについては、風も同様であろう。これも「お絹」からであるが、「何時の間にか風が出て、柿の葉がざわ〳〵と戦いだ」という表現がある。風は空気の移動に過ぎず、それ自体に音は無いが、何かを揺らしたり、何かの抵抗に遭ったりしたときに音が鳴る。この場合は柿の葉というわけである。これが風に音が生じるからくりである。

ただし、「古今集」に収められた藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」のように、具体的なぶつかり先の見えない風の音も多く書かれてきたことも確かである。宮澤賢治の「風の又三郎」（生前未完、引用は『新校本宮澤賢治全集』第一一巻、筑摩書房、一九九六年一月、に拠った）には、「どっどどどうど　どどうど　どどう、」と風の音が描写されているが、これは風自体の音であるのかどうかは不明である。

風の吹く場所、風の当たると思われる対象が明らかな風もある。

代表的なものが松風であろう。「源氏物語」の巻の名でもある「松風」という言葉は、謡曲にも引き継がれ、既に長い文学的な伝統をまとった固定的な表現となっている。「源氏物語」の「松風」は、明石の尼君の「身を変へて一人帰れる山里に聞きしに似たる松風ぞ吹く」から採られた巻の名であるが、松籟とも表現される、松の木を揺する風の音から来たものではあるが、その音の実態は必ずしも明らかではない。

斎藤茂吉の歌集『あらたま』（春陽堂、一九二一年一月）に収められた「一心敬礼」と題された連作（一九一四年）に「目をとぢて二人さびしくかうかうと行く松風の音をこそ聞け」という歌があるが、これを引用した尾崎一雄の「松風」（『新潮』一九七一年一月）は、近所の神社の老松が伐られてしまい、松風を聞くことができなくなったことを嘆くために書かれたような小品であるが、ここには「かうかう」と茂吉がうたふ松風は聞えない」と書かれている。尾崎はことさらに、「かうかう」を松風の音と聞き取ったようである。

このような松風へのオマージュと対照的であるのが、国木田独歩「武蔵野」（『国民之友』一八九八年一月～二月、原題「今の武蔵野」）の木々の音の描写である。この対象は独歩の意図的なものでもあったようで、以下のような記述が見える。

元来日本人はこれまで楢の類の落葉林の美を余り知らなかつた様である。林といへば重に松林のみが日本の文学美術の上に認められて居て、歌にも楢林の奥で時雨を聞くといふ様なことは見当らない。

また、次のようにも述べている。

自分は屢々思ふた、若し武蔵野の林が楢の類でなく、松か何かであつたら極めて平凡な変化に乏しい色彩一様なものとなつて左まで珍重するに足らないだらうと。

あたかも、松に恨みでもあるかの如き口調である。独歩は「落葉林の趣き」を好む理由についても、作中に種明かしをしている。木の種は異なるかもしれないが、同じ落葉林である樺の木を描いた、ツルゲーネフ作、二葉亭四迷訳の「あひびき」（『国民之友』一八八八年七月～八月）に影響を受けたというのである。そしてそこに、落葉林の音も引用している（以下は孫引きではあるが、「あひびき」の初出該当箇所を確認したところ、句読点表記以外異同がなく、この初出本文からの引用と判断されるために、敢えてそのままにした）。

自分は座して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戦いだが、その音を聞たばかりでも季節は知られた。それは春先する、面白さうな、笑ふやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、

また末の秋のおど〳〵した、うそさぶさうなお饒舌りでもなかつたが、只漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語の声で有つた。そよ吹く風は忍ぶやうに木末を伝ツた、

落葉林の葉の様子が、その林の音を変化させる点に、魅力を求めているようである。常緑の松とはもちろん条件が決定的に異なる点である。

ただし、葉の震う音が風の音であることに相違はない。まずその共通性に注目すべきであろう。

七、野の音の変化と交響

「武蔵野」には、風の音のみならず、時間や季節によって変化する林の全体像が、音や静けさで表現されている文章も見える。音がない、あるいは静かであることが、殊更に描かれるのである。これは、冬に葉が落ちる落葉林の特徴でもあるが、無音や静けさへの殊更の留意という、逆説的な音の描写とも取ることができよう。

作中には「自分」の日記の引用が挿入されているが、その一八九六年一一月二六日の項には、「をり〳〵時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静かなり」とあり、また一八九七年一月一三日の項には「夜更けぬ。風死し林黙す。雪頻りに降る。燈をかゝげて戸外をうかゞふ、降雪火影にきらめきて舞ふ。あゝ武蔵野沈黙す。而も耳を澄せば遠き彼方の林をわたる風の音す、果して風声か。」と書かれている。

微かな音はともかく、聞こえない音、そこにない音の描写は、考えてみれば困難であろう。

このような表現も織り交ぜ、武蔵野の音の全体像が一気呵成に書き付けられたのが、以下の文章である。

楢の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。凩が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千万の木の葉高く大空に舞ふて、小鳥の群かの如く遠く飛び去る。木の葉落ち尽せば、数十里の方域に亘る林が一時に裸体になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此上に垂れ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空気が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞へる。（略）秋ならば林のうちより起る音、冬ならば林の彼方遠く響く音。

鳥の羽音、囀る声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声。叢の蔭、林の奥にすだく虫の音。空車荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外国人である。何事をか声高に話しながらゆく村の者のだみ声、それも何時しか、遠かりゆく。独り淋しさうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲声。隣の林でだしぬけに起る銃音。自分が一度犬をつれ、近処の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を読んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとに臥て居た犬が耳を立

てゝきつと其方を見詰めた。それぎりで有つた。多分栗が落ちたのであらう、武蔵野には栗樹も随分多いから。

若し夫れ時雨の音に至てはこれほど幽寂のものはない。山家の時雨は我国でも和歌の題にまでなつて居るが、広ひ、広ひ、野末から野末へと林を越へ、杜を越へ、田を横ぎり、又た林を越へて、しのびやかに通り過く時雨の音の如何にも幽かで、又た鷹揚な趣きがあつて、優しく懐しいのは、実に武蔵野の時雨の特色であらう。自分が嘗て北海道の深林で時雨に逢た事がある、これは又た人跡絶無の大森林であるから其趣は更に深いが、其代り、武蔵野の時雨の更に人なつかしく、私語くが如き趣はない。

秋の中ごろから冬の初、試みに中野あたり、或は渋谷、世田ヶ谷、又は小金井の奥の林を訪ふて、暫く座て散歩の疲を休めて見よ。此等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて微かな音をし、其も止んだ時、自然の静蕭（ママ）を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覚ゆるであらう。武蔵野の冬の夜更て星斗闌干たる時、星をも吹き落しさうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分は屢々日記に書た。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分は此物凄い風の音の忽ち近く忽ち遠きを聞ては、遠い昔からの武蔵野の生活を思ひつゞけた事もある。

熊谷直好の和歌に、

よもすから木葉かたよる音きけは
　しのひに風のかよふなりけり

といふがあれど、自分は山家の生活を知て居ながら、此歌の心をげにもと感じたのは、実に武蔵野の冬の村居の時であった。

引用が長くなったが、「武蔵野」が殊更に音に注目した作品であるのかを示すのに、これだけふさわしい文章はなかろう。確かにここには「村の者のだみ声」や「女の足音」や「砲声」など、自然の響きではない音も含まれているが、この武蔵野の音の全体像の中では、人間存在も実に小さなものに見え、あたかも自然の一断片であるかの如くである。

自然を描写することは、時に、相対的に人間存在を小さなものとする。逆に云えば、自然の響きに耳を傾けるとは、人間が自らを客観視する、より大きな視点を導入する一つの方法として機能するものなのかもしれない。